

ざいたくしんぶん

Medical & Welfare

発行

さくらメディカル(株)

〒943-0141 上越市子安 1378 番地

TEL (025) 522-3391

編集・協力

たかだ越書林

武藤社長、20年の軌跡を語る

昭和六十三年四月、当時不惑の年(四十歳)の一大決意で起業を思い立つ――

十坪のプレハブでスタート。机と電話を設置。エアコンなし、ストーブと扇風機のみだった。

一年目は、売上金額がほとんどなく、手持資金が半年でゼロになる。二

のが難しく、福祉の方で特徴を出していこうと考えた。

在宅向けに紙おむつの配達を始める――

丁度その頃、介護者が重いオムツを買いに行くのが大変だということに着眼して、オムツの配達を始めた。仕事は増えた

努力と運と友情に支えられ



平成20年9月20日、湯沢・NASPAニューオータニ「設立20周年記念大会」で社員を前に語る武藤社長

年目も必死に働くが、過労や心労で体調を崩す。それでも年間売上金額は倍増した。前職(医療器械の営業)の経験をもとに医療器械の販売が中心

独立後、今までのお客様とのつきあいはほとんどなくなってしまうが、中には、今までどおりの開業医の先生もいて随分助けられ、お世話になった。だが、医療器械の販売は、既存の状況を崩す

が単価が安く、利益には繋がらなかった。その後、紙おむつが市町村の給付事業として制度化され、ようやく利薄が生きるようになった。

――平成元年 厚生省(現厚生労働省)の「ゴールドプラン」がスタート――

デイサービスセンターや在宅介護支援センター

の整備目標数が発表され、少しずつ商売が広がってきた。

平成二年、当時はまだ個人商店であったが、上越地区のデイサービスセンターの開設にかかわり備品などを提案して立ち上げを支援する。ゴールドプランや新潟県の市町村の情報キャッチし、行動した。特に、新潟市や長岡市での前例がとも参考になった。

――もつとも
困難だった時期――
ある日、下血(血便)し、「がん」を覚悟、仕事や身辺の片付けをはじめた。ところが診断では「なんでもない」といわれた。この頃に身体に無理をかけたと思われる。仕事のことを気にすればするほど症状がエスカレートし、仕事中に倒れたこともあった。

――平成二年
医療機器や福祉用具のレンタルを開始――
せっぱつまった状況で

北欧式トランスファーテクニック(移乗技術)体験記

つらい介護からやさしい介護へ！ 毎回好評の「北欧式トランスファーセミナー」が、今年も六月三十日に新潟ユニゾンプラザで開催されました。以下に受講者の体験記をご紹介します。



実技指導の先生方

介護方法の原則から全く異なる現実に驚かされた。デンマークでは利用者者と介護者双方にとって良いケアが受けられ、提

生まれたのが、当時は誰も手がけていなかった「レンタル」だった。医療器械の営業をしていた時に、開業医の先生の往診に同行し、在宅の寝たきり老人の状況からエアマットのレンタルを会社に提案した。昔は、寝たきりになるとすぐに床ずれができ、そのまま自宅で亡くなることも多かった。

その頃、あるメーカーからエアマットが発売され、それを使ってみると床ずれが治った。だが、回収後の消毒や保管が問題となり、エアマットのレンタルは中止となる。また当時、介護ベッドは販売しても利用者さんが亡くなると「誰かに使

践したい(高田訪問介護課 武藤真由美)。

「目からウロコ」の体験だよ」と聞いていたが、ほんとうにそうだった。小柄な私は、大柄な方を介助するときは苦勞が多く、腰を痛めることが悩みだった。しかし「らくらくシート」を活用すると腰への負担が簡単になり驚いた。この技術は、今後のサービスでも応用したいと感じた(高田訪問介護課 深石可奈子)。

――真剣に、まじめに――
仕事を通して「本当に働いたところから真実が生まれる」ことを痛感した。ただし、自分が一生懸命なだけでは足りなく、お客様のために真剣に、真面目にやることが大切で、追い詰められると知恵がでることも体験した。

当社設立二十周年記念にお二人の講師をお招きした記念講演を九月二十日（土）、湯沢のNASUPAニューオータニで開催しました。講師はシルバー産業新聞社の安田勝紀編集長とヘルパーの地位確立と体系作り尽力した畔上加代子様。今回は、畔上様の講演の抜粋を掲載します。

井上千津子さんの出会い

武藤社長と私は社員さんが7、8人位の頃に出会いました。私の会社を訪問入浴で何人が研修にお見えになったところからでございます。

社長は「口で言いますと、柔らかい面と硬い面の二つ持って、絶対に自分の考えたことは貫徹するという方であります。そんな社長と私を結びつけたのが、介護道では第一人者の井上千津子さん（現京都女子大教授）。彼女は、中学校の先生をしていたある日、突然子どもさんから「老いるってどういうこと？」と聞かれて答えられなく、先生を辞めてヘルパーになったという変わり種ですが、彼女が新潟県のホームへ

官権と福祉道

私の父は検察庁の検事で、売春婦を取り締まる部署におりました。父も母も優しい人で売春婦の子どもを、多い時には十人も家で、ミルク代を調達するため質屋通いまで

介護福祉、草創期を語る ——私の半生記——



講師
ヒューマン・ケア・ネットワーク
会長 畔上 加代子様

と強いネットワークを感じます。

ルパー協会の会長の時に、私が挫折をして鬱になりかけた頃に出会い元気をもらったのです。武藤社長、井上さん、私

い取り調べを受けたのですが、新聞記者の兄に身分を明かされ助けられました。勿論、警察は平謝

煙の姿はどんな形

若い頃は驕り昂ぶるも

り、この件はなかったことにしてくれと虫のよいことをいいます。ふとその時に、私が検事の娘という立場でなくて黙秘を使っていたらどうなっだろうと思ひ、その頃本当に貧弱だと言われた福祉の道に踏み込んだのです。

して預かっておりました。大阪の大学の時に安保闘争にまき込まれ検挙されました。父が検事なので、父に迷惑を掛けると困ると思ひ黙秘権を使いました。その結果、厳し

若さゆえの頑張りで働いていたのですが、ある日、全盲のお子さんから「先生、煙ってどんな大きさかい」と聞かれました。生まれつき目の見え

ままくるくと新聞紙にくるんでしまいました。明日になったら当然溶けてありません。隠した場所を知っているのは私と本人の二人。ないわけですから、誰を疑うでしょう。私です。「先生、食べたんやな。おいしいからとっておくって言ったのに、先生、食べたんやな」。彼女はそれから

「食べてない」という証明ができない私に一言も口をききませんでした。そういう中で、ずっと私は施設で働いて、私が見えているから、動いているからできるんだという驕りにたくさん気付きました。えらい仕事始めて、引き返せないなっていうふうになりました。

ひとりよがりの「感動」?

そのうちに結婚して今

所などいらんから来ないでいい」ということです。役所の冠をかぶっていった私はこんな目に遭うとは思っていません。丁寧に挨拶をうけて「ようこそ……」などと言われると思っていたのです。でも塩をぶっかけられたのです。それでもまだ意味がわからなかった。とりあえず訪問は失敗。彼女の家族構成、生い立ちなどを再点検しました。主たる介護者がおばあちゃんだということがわかり、農業の父母と兄、高校生の妹さんがおられる。じゃあ、お母さんに塩をまかれたんだから、主たる介護者のおばあちゃんだけに行けと思ひ、今度は農家の忙しい時期に再度訪問しました。おばあちゃんに招じ入

れられたところは、嘔吐しそうな悪臭と銀蟻が群がり、風呂など入れてもらえない、ような少女がおりました。「これがA子です」とおばあちゃん。彼女の異様に白い歯が私を見て「コリ」と笑いました。私が何者か知らないのに笑って私を迎え入れたというのがものすごい感動だった。お湯を沸かしてもらい、手も足もガタガタ震えながら綺麗にすることに専念しました。彼女は非常に感性の発達している子で、五十音を教えるるとすぐに覚え、言葉が重なるようになり、ました。物の名を教えるると実物を見たいというふうに発展します。私は彼女をおんぶして、庭のまわりを巡り実物を見せました。そうしたら、私の背中にはぼつん、ぼつんと温かいものが落ちてきました。嬉しいと言っていて泣いている。私も一緒に泣きながら、彼女を負ったまま見えない世界を見て嬉しかったその感動を共感しました。共感すると同時に自分の役割がとても大事なように思えたのです。人というのは感動を分かち合った時に最も生命力がわくものだと

ない方は形がわかりません。手に触って、その感じ物を確認できるかもしれないませんが、煙などはまったくわからないのです。例を挙げて説明しようとするのですが、比較するものもありません。もう一つは知恵遅れの女性で、彼女は氷が「溶ける」ということが理解できません。ある日、民生委員から貰ったアイスキャンディを新聞紙に包んで机の引き出しに入れてしまいました。「溶けちゃうよ」と言いましたが、施設に冷蔵庫はありませんし、氷は氷屋さんにいかなければならない時代だったから、溶けるということが教えられなかった。「食べちゃいな」と私。「いや、おいしいから明日も食べる……先生と私しか知らないから大丈夫や」ということで、彼女はそ

お仕事をいただきました。私は過去の失敗なんかを払拭するようにそれに没頭したのです。そこで脳性小児マヒのA子ちゃんという女の子が、辺鄙な町に住み、就学していません。もっけの幸いといい事例を見つけたという気持ちです。それで意気揚々と玄関を開けましたら、四、五十歳くらいのご婦人が出て、挨拶もそこそこに塩壺を抱えてきて、私の頭に塩をまきました。「役

おばあちゃんに招じ入

福祉は重荷

それからずっと訪問を続けていました。これもはっきり言えば一人でのぼせていたんですが、ある日、バスを降りましたら二十五、六歳のお兄さんに「先生、明日から来ないでくれ」といきなり言われ、「何で？」と私は訊きました。だって自分はいいことをしていると信じていましたから。

「△子が長生きすると困るんだ」と言われました。結婚話があり、農家を継いで二人で牛の世話などを頑張りたいと思っ

ている彼は、私が訪問すると彼女が長生きして自分が面倒をみなくちゃならない。それでは結婚相手も困るだろうと言われました。

どちらがいい、悪いじゃない。でも、弱者を邪魔にしている。その彼も弱者かも……。これは老人福祉の問題にもそっくり置き換えられる事じゃないかって思いました。

また何ヶ月か経って今度はセーラー服の女の子とバス停で会いました。やはりまた「来ないで下さい」と。そして続けます。

「私は学校のお友達を一回も家に呼んだことが

ありません。お姉ちゃんが生きてると、お父さんとお母さんは毎日喧嘩をします。お父さんはお酒を飲むとお母さんの髪の毛を引っ張って、『お前の血が悪いからこいつ

う子ができたんだ』と言います。お母さんは『ごめんない、ごめんない』と這い蹲って謝っている。いつもそうやって喧嘩する。お姉ちゃんがいなかったらお父さんとお母さんはこんなことないんです。」

一生懸命、泣きじゃくりながら言いました。「私も友達をよびたい。」と。

私がやってきたその福祉道で、助けると思っていた事が、本当は違っていた事、違っていた形、違っていたところ、やっぱり誰かに重荷を与えているのじゃないかというふうに思いました。

それでもまだ、訪問を続けていたのですが、おばあちゃんの死に直面しました。断末の苦しい時に立ち会って、遺書を渡されました。わら半紙に鉛筆で「△子に会ってくれてありがとう」と書いてありました。八十二歳のおばあちゃんが死をも

って私に「ありがとう」というメッセージを下さ

ったことは、私が本当に△子ちゃんを救ったかど

「きこ」を差別する自分と「明日」に感動する自分

完全に打ちのめされま

そこで、やめようと思った時に、井上千津子さんと出会いました。「新潟に来てみなさい」と声を掛けられ、彼女がホームヘルパーをしている現場に行く決心ができました。

私は九州生まれの大阪育ちですから、雪なんていうのはまるきり縁のない世界で、雪の中を家庭訪問しているという現実

が全然わからない。千津さんが訪問していた家は、彼女が最初に雪を掻く人でした。雪を掻いてやっと玄関をあけておばあちゃんの清拭をし終わったら、お味噌汁を作って……と独楽鼠のよ

ヘルパーの学習体系(カリキュラム)を作る

「悪いんだけど、ヘルパーさんね、学問的な裏づけがないのよ。」

文書が残すという伝達技術がなかったのです。

「これじゃ絶対駄目だと思ふのよ。掃除、洗濯も勿論大事よ。会話もね。私たちは、ここで見た光景を見られない人に伝え

うか本当はわからない。

うに働いています。それを見て、私は本当に自分がやってきた世界とまる

で違った「老い」というものを見た気がしました。私は自分の福祉の世界で「老い」というのを差別していたのです。どうして

もやっぱり高齢者福祉はやりたくないという思いがしていたのですが、彼女のその様子を見て、「明日また来るからね」と「明日」があるんだというメッセージを残していることに感動しました。

「お年寄りにサヨナラって言っちゃだめよ。『またね』『今度ね』って」千津さんはまた次の家に行く。こんな雪の日に、よくやれるものです。

安全・快適な「オーガニックパジャマ」

シヨップ便利用品ご案内

と言われて、一週間くらい滞在しました。私はその時三十代でした。全国に登録してあるという三十代のヘルパーさんは当時わずかしいかないです。私は自分の我を通しました。高齢者福祉課という窓口ができた始めの頃だったので、そのうちに体系作りをしようということ、私と井上さんと金子テルさんという埼玉県のヘルパーの会長の三人が厚労省の古い建物の中でヘルパーさんの学習体系を作りしました。後にこれが介護福祉士

の誕生になったのですが、その時に、一番大変だったのは看護師さんでした。看護の人たちは、自分たちがそれをやるから介護の資格を作らなくていいと主張して譲りません。資格はつくらなくてもいいというようなことを言われました。

でもこれは、看護師さんの下にヘルパーさんがいるという上下関係じゃない。パートナーです。オムツを替えるにも専門性がある。人の体に触れるのですから、倫理がいります。ちゃんとそれを私たちが学術的に体系に

しましようということで、講師の先生方をはじめ多くの人たちにも手伝っていただきました。彼女たちは非常に有名でしたから応援はしてくれましたが、実際に作業は千津さんと金子さんが行いました。カリキュラムを作った、養成学校を作るための働き掛けもやりました。そういう中で私は井上千津子さんに介護道ということを習ったものです。

着心地や肌触りに気を配った「オーガニックコットン」の自然素材を採用しているパジャマ。オーガニックコットンは、農薬や化学肥料をまったく使わない有機栽培で作られた綿です。お肌の弱い方や乾燥肌の方にも着ていただける「身体にやさしい素材」です。図のパジャマでは、肌に触れる内側の素材にオーガニックコットンを一〇〇％使用しています。ズボンの両脇がファスナ

ーで開くようになって、着脱やおむつ替えがしやすいやさしい設計になっています。ファスナーを使用せずにそのまま

はくこともできます。生地が2枚構造になっていて中間の空気層が保温効果を高めてくれます。秋から冬に向かって寒くなるこの季節におすすめのパジャマです。



オーガニックパジャマ(婦人用) 定価 8,925円(税込)～

紹介

本社

さくらメディカル営業所



本社営業部・総務部
 〒943-0141
 上越市子安1378番地
 TEL (025) 522-3391
 FAX (025) 522-2755



をはじめ妙高市や糸魚川市のお客様を担当しています。上越には、営業部の他に介護部（居宅介護支援・訪問介護・訪問入浴サービス）もあります。これらのサービスとも連携しながら、上越全域の皆さまの住み慣れたご自宅での生活を支援できるように、今後も「地域に密着した福祉貢献」を目標に全スタッフが一丸となって取り組んでいきます。（上の写真は本社営業部・総務部のスタッフ）

新潟県の南西部で日本海に面して位置する上越市は、平野部と山間部、海岸部があり、とても変化に富んだ地形と美しい景観や多様な自然に恵まれています。

さくらメディカルの「本社」は、夜桜で有名な高田公園や県立中央病院の近くにあり、とてもわかりやすく足を運んでいただきやすい場所にあります。昭和六十三年四月に南高田で設立された当社は、平成十一年八月に本社社屋を現住所に移転し、今年で会社設立二十周年の節目を迎えました。現在、本社営業部には営業課と医療営業



さくらメディカル(株)本社社屋

課、福祉任環境課、営業支援課があります。また、一階の介護ショップでは、多くのお客様にご来店・ご利用いただいています。さらに本社総務部として総務課と経理課があり、本社全体では総勢三十一名のスタッフで、上越市

工場視察レポート

新生産ラインが完成したパラマウントベッド千葉工場

介護ベッドの最大手であるパラマウントベッドが新生産ラインを本格稼動！こんな情報を聞いて早速、六月十二日に武藤社長以下総勢十二名で話題の最新鋭工場を視察してきました。

同工場では今回の再編に伴って、自動車メーカーの生産システムを参考にした「同期・同調一貫生産ライン」を導入したのが最大のポイント。専門的になりますので、ごく一部を紹介し、ご紹介します。例えは今まで5日間もかかっていた工程がなんと



「同期・同調一貫生産ライン」自動車メーカーのシステム導入

6時間に大幅短縮することが実現できたということです。工場内では大きな設備



やロボットも稼働していましたが、やはり主役は作業員でした。一人ひとりが「品質」と真剣に向

き合い、一つひとつの作業を行なう姿に「さすがプロだ」と感心しました。「これが介護ベッドの

- ④パラマウントベッド千葉工場。ここでベッドが誕生しています。
- ⑤介護ベッドの最初の姿（ロール状の鋼板）

最初の状態です」と説明された鉄の塊も工場内を歩いていくうちに段々と見慣れた姿になり、介護ベッドへの親しみが倍増しました。そして、工場で働く人たちの想いがいっぱい詰まっている介護ベッドを「今度は私たちがきちんとお客様にお届けする」という気持ちになった貴重な初夏の日でした。



介護簡単メニュー

旬の食材で『イワシのつみれ焼き』



「介護食」とは特別な食事ではありません。ちょっとした調理のワザ、例えば切り方を工夫したり、加熱しても硬くならない魚を利用したり、季節感あふれる食材や柔らかさが自由自在になるたまごや栄養価の高い大豆など利用して、「サラサラ」「パサパサ」「バラバラ」「ベタベタ」にならないように、舌でもつぶせる硬さで、喉ごしのよい食事にすることが大切です。今回は旬を迎えて美味しくなっているイワシを使って「つみれ焼き」を作ってみましょう！

- 作り方（10人前）
- ①イワシの尾を手開きし、包丁で身をたたいて袋に入れ、④の材料と一緒によく揉んで小判形にする。
 - ④（ねぎのみじん切り：大さじ2、しょうがのみじん切り：大さじ1より少なめ、青じそのみじん切り：大さじ1、みそ：小さじ1、溶き卵：3分の1個、しょうゆ・砂糖・みりん：少々、片栗粉：大さじ1）
- ②油を熱してフライパンで両面を焼く（強火にしないのがポイント!）。
- ③たれ（水：1カップ、砂糖：小さじ2、しょうゆ：大さじ1、顆粒だし：少々）を鍋にかけて煮たて、その中に両面を焼いたイワシを入れて、くずれないように気をつけながらさっと煮る。
 - ※片栗粉でトロミをかける時は、一旦イワシを取り出してからトロミをつけます。

さくらメディカル(株) 高田訪問介護課 板倉寛子(介護食士)